

江山洵美是吾郷

—志賀重昂と牧口常三郎における

「メディアとしての郷土」

武 田 徹

I

「江山洵美是吾郷（大槻磐溪）」の一句を引くところから志賀重昂『日本風景論』は書き出される。この作品に関しては、刊行時に書かれた書評・紹介（大室2003：cf. 20f）に始まり、戦後の松田道雄（1975）、猪瀬直樹（1986）、亀井俊介（1988）による再評価に至るまで、多くの注解・評論が書かれてきた。本論文は、それらとはやや視点をずらし、『日本風景論』がいかなる「郷土イメージ」を形成する「メディア」として機能したか、そしてその「郷土イメージ」は、翻って日本社会をいかなる方向に導く「メディア」として機能したか、その二段階の「媒介／接続」に関わるメディア機能に重心をおいた議論を前半で試みる。

そして後半では前半で採用したメディア論の枠組み上に、志賀と因縁浅からぬ地理学者・地理教育者であり、やはり「郷土」について考察を重ね、死後には地理学の領域を遙かに越えた大きな影響力を持つに至った牧口常三郎を取り上げ、こちらも「郷土」のメディア機能について論じる。

II

まず一つの事実を挙げることから論を始めたい。

誰が見てもそう受け取るだろう形式で書かれていながら、冒頭に引いた句は実は大槻盤溪の作ではない（『日本風景論』（志賀1995）巻末の近藤信行の

解説など)。大槻が1862（文久2）年に藩命をうけて仙台に帰る途中で読んだ句は以下の通りである。

百年天地寄蜉蝣／明哲全身即善謀／帰去終焉ト云吉／江山信美是吾州

「洵」と「信」も共に「まことに」と副詞として読めて訓読上の齟齬も来さない。強調の意味で「洵」の使用する用例は志賀だけでなく、幸徳秋水などにも見られた（大室2003：cf. 172）。それに比べて句末の「州」と「郷」の違いは大きい。後に藩校「養賢堂」の学頭を務める要職に就くし、薩長官軍との戦いでは藩を代表して檄文を書いた磐溪は、間違いなく伊達藩の忠実な家臣であり、彼が帰郷の過程で景観の美しさを謳った「州」とは伊達藩62万5千余石の領国を示している。

ところがそれを志賀は「郷」に書き変えた。前田愛は「江山洵美は吾郷」の句が「志賀重昂の風景論を要約するキーワード」（前田1990：244）だとしたが、より重要なのはこの書き換えの経緯だろう。「郷」とは故郷である。しかし1863（文久3）年に三河藩岡崎に生まれた志賀は「郷」の語で故郷の三河藩をインデクスにはしていない。

郷里の岡崎を出て上京した志賀は東京大学予備門に合格するが、二年後に退学し、札幌農学校に転じている。いわゆる司馬（遼太郎）史観にも通じることかたちで、戦時期の不健康なウルトラナショナリズムに対して明治人・志賀を健康なナショナリズムの担い手と評価した松田道雄は「フロンティアはみんな北海道にいった」と札幌農学校の学生に高い志に支えられた進取の気概を見ようとし、「志賀重昂はまさに札幌農学校の嫡出の子」と評している（松田1963：37f）が⁽¹⁾、ここでは上部構造（＝志）だけではなく下部構造（＝経済）から進学先選択の背景を推測することも必要だろう。

卒業名簿から札幌農学校で志賀と同期で卒業した面々のプロフィールを名簿⁽²⁾で調べると「高い志」の背景事情がうかがえる。卒業生の17人中11人が元士族で、それも薩長藩閥政治では周縁に追いやられた藩の出身者であった。

志賀も例外ではない。父・重職は庶出の次男坊であったが藩命によって昌平黌に学び、帰郷後、岡崎で塾を開くことを認められる。しかし門人の玉置

政治（後の岡崎市市長）らが榎本武揚の幕府軍に加わって五稜郭に立て籠もった責を負わされて重職は蟄居を命じられ、68年に39歳の若さで病死する（山本・上田1997：cf. 20～23 以下、志賀の生い立ちは同書を参照した）。

こうした生い立ちが子・重昂の成長に影を落としている。暮らしに窮しては父の元門弟の援助を受けつつ育った志賀重昂は11歳の時に玉置政治の弟である鳥羽大作に伴われて上京。叔父・志賀二郎が教鞭を執っていた縁もあり、海軍兵学校教授・近藤真琴の経営する攻玉社に入学した。当時の攻玉社は慶応義塾の536人に告ぐ351人の学生を擁する著名な教育機関だったという。その攻玉社から札幌農学校へ進んだ志賀の軌跡はひとつの典型であり、他にも維新時の経緯から明治新国家ですぐには栄達がはかれず、経済的にも不遇をかこっていた家系の師弟たちが多く農学校の門を叩いている。志賀が入学した時には、新渡戸稲造や内村鑑三の時代にあった学生に対する官費支給制度はもう無くなっていたが、それでも学費の貸与は受けられたし、生活費全面に及ばずとも支給制度の名残はあった。それは新渡戸、内村と同じく志賀たちの代の農学校生にとって魅力だったのだろう。

たとえば、先に掲げた卒業生名簿は彼らがまさに日本全国から集っていたことも物語る。札幌農学校は旧藩の区分を超えた「日本」統合を先取りする場所となっていた。加えて北海道の開拓作業も始まったばかりで「日本ではないもの」との緊張関係の中で「日本」が意識させられ、それをいかに守り、広げてゆくかを常に意識させられる環境であった。こうした状況があってこそ札幌農学校と、その伝統を礎として発展する後の北海道帝国大学が、海外への植民を通じて「日本」の「帝国」化を図る「植民学」の研究拠点となっていた（cf. 井上2006）のだろうし、志賀の人生にも大きく影響を及ぼしてゆく。

志賀はこの学校で外国人教師から海外事情を吸収し、また自由民権思想の息吹にも触れた。その様子は『朝天虹ヲ吐ク——志賀重昂「在札幌農学校第貳年期中日記」』（亀井・松木1998）に詳しい。日記には志賀が農学校在学中に二度、海外雄飛を目論んでいた事情も記されている。まず1882年に欧州行を志す。このときは東京に赴き、出立の体制を整えたが果たせていない。後

年に「当時自由党への入党を考えた」と記しているのが、海外雄飛よりも国内での政治活動に志望を変えたとも推測されるが、定かではない。

二度目は農学校卒業間近にカムチャッカに行こうとしている。これは樺太冒険家・岡本文平の著作を読んで大いに感化されたようだが、こちらも果たされなかった。農学校卒業後は1884年に一度は長野県中学校長野本校（現在の県立長野高校。県内にあった郡立中学校を統合して新設）の博物教諭として赴任したが、県令の木梨精一郎と衝突して⁽³⁾、在籍一年にして辞職。上京し、攻玉社の近藤真琴人脈を頼って海軍練習船「筑波」に乗船することに成功。英艦隊による「巨文島」占領事件を受けて実施された対馬視察に出かけている（山本・上田1997：cf. 29）。そして同じ「筑波」が今度は南洋視察巡航に出ると聞きつけ、農学校時代に知遇を得ていた時の海軍大臣・西郷従道に直訴して（亀井・松木 *ibid.*：cf. 5）再びこれに乗船。昔年の念願をついに叶えて1886年6月に初の海外渡航に出る。

III

この南洋行きを志賀は3つの言論活動に結実させた。その1つは言うまでもなく彼の言論人としての評価を確かなものにした単著『南洋時事』だが、その刊行以前に渡航報告として福沢諭吉が創刊した『時事新報』に『南洋巡航日記』を寄せ（1884年5月26日から6月11日に断続的に掲載）、また視察先のひとつであったオーストラリアはシドニーの英語夕刊紙 *Echo* に三回にわたって（1886年4月10, 17, 24日付）最新の日本事情を報告する記事を寄稿している。

この旅に出た時の志賀がダーウィニズム（だけでなく、その社会的適応であるスペンサーの社会ダーウィニズム）に強い関心を寄せていたのは彼が『ヴィーグル号航海記』（まだ進化論に至る前のダーウィンの作品だが——）を携えて船出していた事実からもうかがえる。スペンサー主義は志賀だけでなく当時の知識人に共通する関心事でもあった。たとえば東京大学総理・加藤弘之が『東洋学芸雑誌』（第29号 1884年2月25日）に寄せた論文「社会二起レル人為淘汰ノ一大疑問」で、劣等人種はもはや自然淘汰に委せ

るのではなく、人為的に淘汰されるべきなのかと問うて話題になっており、各紙誌でそれに対する意見が盛んに掲載されていた。その中のひとつに『東洋学術雑誌』（第34～36号 1884年7月25日～9月25日）に掲載された「在札幌 一寒生」の反論がある。「一寒生」はおそらくは札幌農学校関係者であり、更に可能性を狭めて学生時代の志賀だったのではないかとする説もあるが、そこは結論が出ていない。ただ少なくとも「一寒生」と志賀が相通じる問題意識を共有していた事情はうかがえる。というのも彼の南洋巡航は、その経験から書かれた資料群を見る限り「一寒生」が加藤に向けた反論——社会の生産力や分業状態が変われば「優者」の基準も変わってゆく。そうした優者化＝適応の可能性がある以上、人為淘汰は望ましくない——を実地で検証する内容となっていたからだ（山本・上田1997：cf. 54）。

欧米列強が植民地争奪戦を繰り広げていた南太平洋に赴いた志賀は、欧米の「白哲人種」の植民地支配が進む一方で「銅色人種」人口が減少し、絶滅に瀕していることを目撃する。しかし、それは白哲人種が持ち込んだ感染症に銅色人種がなすすべもなく罹患した結果だったと志賀は考えた（志賀1927：cf. 6）。ここから志賀が引いた結論は確かに「銅色人種」は絶滅に瀕しているが、それは銅色人種が白哲人種の文明——医学を学ばなかった結果であり、それができなかった点でこそ銅色人種は劣っていたというものだった。

ここでも志賀は「銅色人種」の生存権を否定していない。彼らにも適応の可能性がある以上、「種」として人為淘汰の対象としたり、抑圧されたりすべきではないと考える。しかし「銅色人種」は人為淘汰を経ずとも——最近流行の言葉で言えば——文明化を選ばなかった「自己責任」によって適応の道を歩めずに自ら滅びてゆく（これが翻って日本人読者に対しては欧米列強の前に滅亡の途を行きたくなければ文明化を急ぎ、「優者」となって近代社会に適応して欧米の植民地主義へ抵抗せよという警世のメッセージになる）。

こうして南洋を舞台に現実的な優勝劣敗の進捗を認め、文明化を肯定する延長上で南洋への欧米「白哲人種」による植民、なかでもオーストラリアに

対するイギリス植民活動の「成功」をも志賀は肯定する。このように「一方で被植民地の解放を主張しながら、同時に植民主義的な方策を語る。これはのちに日本が引き受けることになる〈近代〉の逆説であるが、こうした言説の原型が、早くもここに現れていたと言える」と亀井秀雄（亀井・松木1998：6）は志賀の『南洋時事』を評する。実際、この逆説を孕んだ二面性は矛盾と思われずに受け入れられ、『南洋時事』は志賀の文筆家としての評価を確定する。「むしろこの時代には、その二面性のゆえにこそ『南洋時事』はすぐれてアクチュアリティを発揮しえたのだと見るべきであろう」（ibid.）。

ただし、そこで二面性を横断して接続する媒介があったことに注意しておきたい。たとえば植民活動を肯定した志賀は同時に「白哲人種」文明圏の中でオーストラリア植民たちが本国からの独立運動にも共感を示して、先の二面性を繰り返すのだが、独立を肯定する理由はオーストラリアで育ったイギリス人が「本国ノ風景ヲ見ズ、本国ノ文物ヲ知ラズ、本国ノ親戚朋友モ漸ク死絶シテ只豪州ノ山水ノミヲ愛シ、豪州ノ風土ノミヲ喜」（志賀1927：40f）ぶようになっているからだとされている。

こうして「愛郷心」に注目する姿勢は先の「銅色人種」においてもあり得た。『南洋巡航日記』には『南洋時事』に書かれなかったエピソードも収録されており、筑波が補給のために立ち寄ったクサイ（Kusaie）島でサンセンなる人物と会話したくだりが記されている。クサイ島は当時、感染症が蔓延しており、筑波の乗組員は病気を恐れて島に上陸せず、沖合に停泊して物資の補給のみを受けた。クサイ島の酋長との面会も船上で行われたが、そこに通訳として登場したのがサンセンであった。サンセンは英米商船の水夫として働いた経歴を持っており、英語を解した。この時、サンセンから聞いたクサイ島における感染症蔓延に関する情報が志賀の人口減少説を展開する上での根拠になっていた。そして水夫時代に横浜に寄港した経験もあるサンセンに志賀は「日本の風土愛すべきや否や」と尋ねている。するとサンセンは日本は寒くて好きになれないと答え、クサイ島より優れた場所はないと付言したという。

これについて志賀は『南洋巡航日記』にこう記している。「予輩の眼より見れば米国日本等の大都市を愛さずして却て此炎熱にして四面唯蒼茫たる絶海の孤島を愛するとは不可思議なりと思はるれども己が生国を愛するは人類自然の感情なれば之を如何ともする能はず 前人句あり帰去終焉ト云吉江山信美是吾州と能く人情を穿てるものと云ふべし（山本・上田1997：98）」。

オーストラリア定住イギリス人の独立運動を肯定したのと同じで、クサイ島の「銅色人種」住民の愛郷心への共感が彼らもまたそこに住み続ける権利があると志賀に考えさせ、人為淘汰説を斥けさせたと推測することは可能だろう。そして注目すべきことにここで志賀は大槻の句を正確に引いている。この時点ではまだ「江山信美是吾州」なのである。我が州＝郷土の美しさを愛することに於いて南洋の孤島の人も大槻と同じだと述べる。

IV

旅人であれば、旅の過程で出会う人々の愛郷心に感心しつつ、旅人にありがちな無責任さで、それぞれの生存権を認める主張を、時には相互矛盾を恐れずに繰り返されることが、南洋行から帰国してしまえばそうもゆかなくなる。「絶滅」を避けるために文明化を遂げるべき主体は近代国家日本であり、志賀自身がその国民なのだ。

志賀は1888年に三宅雪嶺らと政教社を作り、雑誌『日本人』を創刊。そこに断片的に書いた文章を含めて『日本風景論』の上梓へと至る。近代日本にとって初めての本格的対外戦争と言える日清戦争の最中の1893年10月27日に出版された『日本風景論』は市場に好意的に迎えられ、同年12月20日には早くも再版が決定。以後、下関条約、三国干渉を経て臥薪嘗胆をスローガンとして日露戦争に向かう戦中期に読まれ続け、1902年までに14もの版を重ねたという（大室2003：cf. 19）⁽⁴⁾。「日本ではないもの」と向いあうことで「日本」を改めて意識する、かつての札幌農学校学生が強いられた境地にこの時代の日本人の多くが立つことになる。そして「日本とは何か」と振り返る眼差しの中に『日本風景論』が現れる。そこでは先行する『日本人』での論説と異なり、理念や主義を語る政論が展開されているわけではない。日本の国

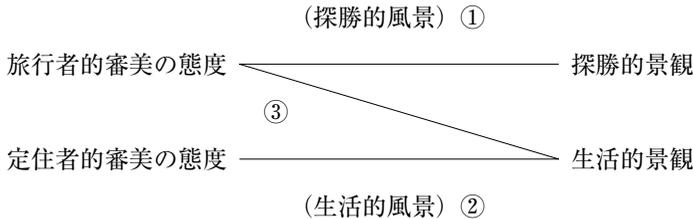
土の成り立ちを農学士の志賀が地理学、地質学などの知見を適宜引きつつ説明してゆく内容だ。志賀に言わせれば、日本の国土の特徴は以下の4点、つまり気候、海流の多変多様なる事、水蒸気の多量なる事、火山岩の多々なる事、流水の浸蝕激烈なる事なのだそう。これらの特徴が日本的風景を瀟洒にして美しく、跌宕なものにしている。そんな優れた国土に住むのが日本人なのだと言はれ、志賀は謳いあげる。そこに「この優れた国土に生きる日本人」の一体感が意識される。国土の風景を経由して国民感を醸成する回路がそこに用意されていた。かくして『日本風景論』は「旧来の歌枕・歌名所的な地理意識、風土意識を一掃して、誰しもが自分の視点からどこでも発見できる風景美を提示しただけでなく、単一体としての「日本」を提示することではじめての対外戦争の勝利に沸き立つ当時の民衆に「国家」というまとまりを、そして、国民皆兵であるがゆえに自分たちが等しく勝ち取った勝利だと信じる民衆に〈国民〉という共同体を意識させ、内面化させる端緒を開くことにもなった」(李1996:227)。

エリック・ホブズボームが指摘するように1870年から1914年の間に多くの近代国家が国民国家形成のプロセスを経験し、近代日本もその埒外ではありえなかった。そうした過程の中に『日本風景論』は登場し、国民の一体感を必要とする状況の中で統一的な日本イメージ=日本の風景を提供した⁵⁾。

そして、この『日本風景論』が世に問われた時、大概の句の「我が州」は「我が郷」に変わっていた。それは個々の藩にある名所旧跡のように細分化された従来の風景の単位ではなく、まるごと「日本」の風景が統一的「郷土」として新しく発見されてゆく過程に符合する。池田弥三郎が書くように風景とは初めからあるわけではない。「風景というものは、ながめられる自然界の側にあるのではなく、ながめる人間の側にあるものだ。……何をもって美しいと見、どのような自然を寂しいとながめたかは、かつて、それを美しいと発見し、寂しいと描いた『芸術』が先行する。……日本人にとって日本の風景は少なくとも日本の文学が先行する」(池田1976:199f)。「我が郷=日本」を実風景を備えた実体概念として認識させるうえで、漢文調の仰々しい文体で国土美を謳い上げた『日本風景論』は大きく寄与したのだ。

しかしこの「風景の発見」には多少詳細な分析が必要だろう。勝原文夫は風景には二通りがあるとする（勝原1979：cf. 19f）。旅行者が出掛けて行って旅行先にある景観を「風景」として認識する①。こうして得られたのが「探勝的风景」だとすれば、定住者が自らの生活の中に見出す「生活的風景」がある②。

しかしこのふたつの「風景」は独立してあるわけではない。加藤典洋は「生活的風景」が発見される上で旅行者の審美による「探勝的风景」として生活的景観が発見される過程③を経由する必要があると考える（加藤1990：cf. 186）。



たとえば国木田独歩のように武蔵野の景観を改めて新鮮に感じる「新人類」が登場して、東京の日常の中に「風景」を発見する。こうして身近であった生活的景観が探勝的に発見されると加藤は例を挙げる。そしてその発見を、それまではただの景観をとりたてて特別な風景だとは感じていなかった定住者が受け継ぐ。これが生活的風景の形成に至る。あるいは上京した者が一時帰郷して故郷し、「ここがふるさとだ」と述べるのを聞いて「ふるさと」は事後的に再発見されてゆく。

郷土の風景はこうして「外」を経由したひとが帰還して見出されるのであり、南洋を経由した志賀が、「郷土=日本」をあらかじめ日本に定住する人々に発見させたというのまさにこうした図式を辿っている。

しかし、志賀が先に示したように4つの地理的特徴を上げてその優秀さを語った郷土の風景は独特の論理を潜ませていた。大室幹雄がいみじくも看破したように「これら四条の地理学的な特色は、それらが日本に特殊的、つま

り他の国にはない独自性を有するから、すでにそのことのみで優れている。ゆえに論理の必然として、これら四項の地理的条件を欠いている国の風景は、すでにそのことのみで、日本（帝国）の風景とは対照的に、劣等であらざるをえない」（大室2003：275）のである。

たとえば志賀は「わが富士山」を中心として「千歳富士」（チャチャノボリ）、「蝦夷富士」（胆振後方羊蹄山）、「津軽富士」（岩木山）、「南部富士」（岩手山）……と北から始まり、ついには台湾や山東省の山まで含めて〇〇富士と改称することを提案する（志賀1995：cf. 320）。こうした無邪気な提案も、日本だけが優れた風景の条件を備える優れた国だという論理を背景にしている。本物の富士がある日本本土と、のれん分けのように富士の名を分配される周辺国というように上下の序列をつけてアジアと日本の関係をみなすようになってゆく。

その後、志賀は1905年の元旦に『日本風景論』の提案を自ら実施するかのように入露戦争の戦場となった「二〇三高地」を旅順富士と改名するよう第三軍司令部将校に進言している。「二〇三高地が新に何んと附名さるるもせよ、旅順富士と別称し、以て島帝国の勢力の大陸に拡大せしことを顕示するに於て何の不賛者かあるべき」。この提案は兎玉大将以下の署名を得つつも結局立ち消えになったというが、前田愛はこの命名劇から『日本風景論』の本質を解き明かすべきだと指摘する（前田1989：142）。

伝統を無視して西欧文明を受け入れる欧化主義を批判して国粹保存旨義を主張しつつ、近代化による日本の大国化、強国化を求める志賀ら『日本人』同人の矛盾（志賀の場合はそれを『南洋時事』以来、引き継いでいる）は『日本風景論』がイデオロギイ的主張を表面上避けたことにより、解決されずとも露呈していない。志賀は日本の歴史的伝統を支える国土への愛着を喚起することにより、イデオロギイ的差異を超えた国民的一体化、強国化への歩みを用意する⁽⁶⁾。かつてクサイ島民の愛郷心に感動していた志賀は、いつしか国外の既存住民の愛郷心を蹂躪し、武力による人為淘汰も厭わない対外進出論者になり、『日本風景論』が日本の拡大志向を「心情的に」支える拠り所の一つになってゆく。ファシズムが、やはり「心情的」な興奮、一体感を

伴いつつ、多様な論理や主義を調停することなく丸飲みしてゆく国民運動であったことを思えば、『日本風景論』が事後的にファシズムに接続されてゆく経緯については今後、更に批評的な検証がなされるべきだろう。

V

しかし「郷土」はそうした接続を用意するだけではない。ここではもう一人の地理学者・地理教育者の牧口常三郎の足跡に注目したい。

牧口は1871年に柏崎県刈羽群荒浜村に生まれた。やはり早くに父を失い、幼い頃から働いて家業を助けていた牧口は14才の時に北海道に渡る。実は新潟県は北海道への入植者数において他県に抜きんでており、1870年に北海道開拓使の援助を受けて最初の移住者が募られた時に刈羽郡からも22戸、96人の農民が札幌村に移っている。札幌で牧口はまずは小樽で父方の叔父である渡辺四郎治のところに身を寄せ、小樽警察署の給仕となり、札幌に移ってからは小樽警察署長だった森長保の家に書生として入った。この森の推挙により北海道尋常師範学校の試験（第一種）に合格する。

順調に学業を修めた牧口は1892年に師範学校附属小学校で初めて教壇に立ち、96年には文部省中等学校献呈試験を受けて、地理科では北海道初めての合格者となった。翌年には母校の助教諭に任命され、地理科を受け持つ。28才の若さで校長職となり、舎監も兼務するが寮舎で刃傷事件が起こり、職を辞して上京する。その時期に牧口は既に『人生地理学』の草稿をしたためていた。おそらくそれは文部省の教員採用の試験勉強をする際に多くの地理学書を紐解いている過程で適当な概説書がないことに気づき、自ら執筆を始めたものだと思われる（竹内2003：cf. 94）

書きためられていた『人生地理学』草稿は既に著名となっていた志賀重昂を校注者とするので1903年に出版される。平民新聞（1903年11月22日）に掲載された版元である文会堂の広告によれば「本書は非常な歓迎を受け発売10日もたたずに初版がごとごとく売り切れ」たとあり、また紙誌に41の書評が掲載されたという（cf. 塩原2003）。志賀『日本風景論』と同じく良好な売れ行きをしめしたようだが、こちらは地理教授上の好著として主に教員が

買ったものとおもわれる。

そんな『人生地理学』には当然のことだが、牧口の郷土観が如実に示されている。

吾人は例を遠きに需むるにおよばず。東京もしくは北海道等の全国人集合の地において、年々何県懇親会といい、あるいは旧某藩親睦会と称して、故郷を同じうするものが、相集会し、一夕の快談に。その羈旅の情を慰するがごときは、現に吾人のしばしば遭遇するところにあらずや。試みにこれらの人に対するに「なにゆえに爾く郷里を恋愛するか」の疑問をもってせんか、おそらくは何人も即答に苦しむところなるべし。あるいはいわん、父母、親戚および旧友の在るありと。これ大なる理由ならん。しかれども、もって尽くせりとすべからず。一郷拳って移住したる青が島の居民、もしくは占守島の土人の心情を説明し能わざればなり。あるいはいわん「江山洵に美し是れ吾が郷」（大槻盤溪）と、なおもって全豹を説明するにたらず。かえって気候和順、風物新鮮の新楽土を喜ばずして、窮北不毛の故土を慕うものあればなり（牧口1971：35）

ここでは志賀の『日本風景論』と全く同じかたちで、改作した漢詩に（大槻盤溪）と付記して引く方法が採られている。『人生地理学』は志賀の手を経て刊行に至っているので、ここにもあるいは志賀の修正が加えられていたのかもしれないが、版を重ねてなお残っているところをみると牧口自身も特にそれを問題視していなかったと考えていいだろう。

しかしその句が引かれる文脈は微妙に異なり、その差異は志賀と牧口の郷土観の相違を端的に示している。志賀も「かえって気候和順、風物新鮮の新楽土を喜ばずして、窮北不毛の故土を慕う」例として「占守島の土人」が開拓使によって色丹島に移住させられたものの馴染まずに帰っていったケースを挙げていた（志賀1995：cf.13）が、その心情をも含めて「脆きは人の情なり、誰か我が郷の洵美をいはざらん」とし、郷土を洵美に思う感覚は故郷

に住んでいればそれをよく思う、いわば「住めば都」的な普遍的な感覚だとした。まさに南洋行きでクサイ島民とオーストラリア植民のいずれにも感情移入できた所以である。

しかし日本を語るにあたってはそうした「普遍的」愛郷心を変転させ、「然れども日本人が日本江山の洵美をいふは、何ぞ啻にそのわが郷にあるを以てならんや、実に絶対上、日本江山の洵美なるものをあるを以てのみ」

(ibid. : 13f) と志賀は断言する。こうして日本の郷土には特有の風景の洵美さが自存しているという。日本の風景は特徴的だから優れている、日本的であることが優れている理由なのだと同語反復的に規定したのと通じる論理である。

それに対して牧口の郷土観は異なる。「郷土とは何ぞや、その範囲は観る人の立脚点によりて異なる」と牧口は書く。「もしそれ父母の膝下を離れざる幼児に対しては、彼が朝夕相接する家族と近隣少数の子女の外は、みな彼を恐れせしむる外敵たり。この時期における彼の郷土は、すなわちその居室、その房厨、その庭園にほかならざるなり。郡中に高等小学校あり。その生徒各村より集まる。たまたま甲村の少年が乙村の少年を侮辱せんか。ここに両村の少年、相団結していわゆる小郷党の争鬪を演出することも珍しからず。この時における彼らの郷土観は、その属する一小部落たるなり（牧口 1971 : 6 f)」。

志賀の絶対主義的郷土観に対して牧口は郷土をあくまでも相対主義的に見ようとする。確かに「あなたはどこからきたか」という問いかけに対して、その問いの文脈に即して答えは複数あり得る。都市名を名乗るか、国名を名乗るか。帰属場所に関するアイデンティティは重層的な構造をなしており、郷土愛もそれに準じて相対化されると牧口は考える。こうして柔軟に伸縮する郷土は大槻盤溪の「州」でも志賀重昂の「郷」でもあり得るし、そのどちらでもないとも言える。牧口が志賀の改変をそのまま受け入れたのは、そもそも「州」か「郷」という問題意識自体が欠落していたからかもしれない。

そして教育者である牧口の場合、「郷土」の概念も常に地理教育を念頭に置いて語られる。

「広大なる天地の状態は、実にこの猫額大の一小地において、その大要を顕わせり。されば万国地理に現わるる複雑なる大現象の概略は、ほぼこれの僻陬の一町村において説明すること難からず」(ibid.: 39)。こうした郷土観は後に牧口地理教育論の大成となる『教授の統合中心としての郷土科研究』にも引き継がれる。小学校教育の基礎は対象に児童を直接接触させ、観察、感じさせることに置かれるべきで、その教育素材は外から持ってくるのではなく、日頃から児童が接している周囲の環境、つまり「郷土」であると考え。そうした主張をこめて牧口は「郷土科」を「直観科」と呼ぶことも提唱している。「郷土に於ける土地と人生、自然界と社会等の複雑多方面の直接観察によりて然る後に初めて把捉せられるべき過程、学校、町村等の人格的有機体を認識せしむることなしに如何にして国家、帝国なる観念を児童に与へることが出来ませうか。学校、家庭、町村等の種々なる方面に対する関係的位置を郷土観察によりて直観させしむることなしに如何にして国の位置なる観念を与へることが出来ませうか(牧口1981: 19)」。

こうして生活圏、親密圏としての「郷土」を認識の拠点とみなす立場は、イーファー・トゥアンらによって唱えられる、いわゆる現象学的地理学に先駆けるものと見られるかもしれない(竹内2004: cf. 96)(ベルク1993: cf. 405 f)。ちなみに「現象学的」であるのは「直観」に注目する姿勢だけではない。フッサール現象学のもう一つのアイデアである「判断停止」も牧口は採用している⁽⁷⁾。つまりメディアの影響下で形成された「郷土イメージ」をそのまま受け取らない。結果として恩人たる志賀の風景論ですらそこには入り込めず、国家主義臭が「郷土」から消える。現象学的還元には耐えない国家主義イデオロギーはそこに介在する余地があり得なかった。この時期の牧口は「郷土」をおよそ小学校の周辺範囲で考えているが、尋常小学校地理科教科書に出てくる難解な語句を「砂上楼阁」として批判している。教育に相応しからずとされた語句の中には「農作物」「水産物」などと並んで「忠君愛国の心」や「万世一系の天皇」などの概念も含まれていた(牧口1981: cf. 16)。

こうした発想を導く萌芽は実は既に『人生地理学』に見られていた。たとえば山岳に関する見方は見事なまでに志賀と対照的だ。牧口は山河と自らを

一種の運命共同体として見る見方を否定する。「これまで自己と相對峙し、自己と異なりたるものとせる山は、今や自己と同じく世界の一部員となり、自己と相關の交際ある者となり、ここにまったく有情物と化す（牧口1971：215)」。こうなると山河と自己の心情的な一体化がなされ、愛国主義的ナショナリズムが生じる。「吾人は山と一致せるものとして、ともに苦樂をともにし、山が受くる運命をともに経験するの感起こるとともに、その感情は、やがて、山によりて保護せらるる同社会全体に向けらる。激烈なる愛国心が、山国において興起せらるるは、実はこれがためなり (ibid.: 215f)」

「国粹思想は山間に保存される。之は一方では保守を意味し、頑迷固陋を意味する。山河は人々の生活を区画するから人々の思想を狹隘化させる」 (ibid.: 217)。たとえば内村鑑三の『地人論』を彷彿させる地人相關論だが、この箇所は特に志賀を意識して書いているかのようだ。校閲中に志賀は批評の宛先に気付かなかったのだろうか。

VI

こうして同じように不遇の少年時代を経て同じく北海道・札幌の地を經由した地理学者でありつつ、牧口と志賀の郷土観には大きな相違がある。牧口の郷土教育論は「後に1920年代後半から文部省がすすめた郷土教育運動、すなわち国家神道と関連して、郷土の氏神信仰を通じて天皇制と結びついた、超国家主義を鼓舞する運動とは、はっきり一線を画する」(竹中2003：102) 結果となってゆく。

しかし、その一方で牧口の「郷土」は「国家」とは別の概念と接続されてゆく。1928年、牧口は学校の出入り業者を介して日蓮正宗の信者だった研心学園校長・三谷素啓を知り、祈伏を受ける。入信に理由は様々に語らえているが、たとえば鶴見太郎は牧口がかねてより郷土科教育で主張していた直観法と、やはり直観を重視する日蓮の「娑婆即寂光」の概念との近しさを、彼をして入信へと至らせた理由に挙げている (鶴見2002：145f)。

1930年に牧口は「創価教育学会」を設立。同年11月18日、彼の教育理論の集大成である『創価教育学体系』の刊行をこの学会組織を母体に始める。「創

価」の語は「価値を創造すること」に由来する。『創価教育体系』の第二巻となる『価値論』で牧口は、カント流の真善美を価値とする考え方に異を唱え、善美はそのままに「真」を「利」に変えることを主張。利とは「評価主体又は主観たる人間の生命の伸長にあてがわれる対象の関係力（牧口1979：118）」とされる。つまりは人と環境の関係の中で引き出される、人間にとってプラスの価値ということか。こうした見方も、そうとは明言されていなかったが、早くから牧口を捉えていたようだ。『価値論』の序文で彼はこう述べている。「人生地理学は地人関係の現象を研究対象と為し、その間に於ける因果の法則を見出そうとしたもので、全く価値現象を研究して居たのである。それは今本書に於て価値概念を分析し、遂に其の本質を評価主体と対象との関係力なりと定義したのによっても判然しよう。即ちその当時は価値という名称にまでは至らなかったとはいえ、既に薄膜一重のところに接近して居たのであるが、之を意識しなかつただけに過ぎない……『人生地理学』は人間の生活現象の地理的分布を対象とし、それに於ける因果の法則を見出し以て社会の空間的各方面の連帯性を闡明せんとするものであり、『創価教育学』は又被教育者の生活を指導する方法上の因果法則を探求せんとする」（牧口1979：8～10）

ここに『人生地理学』と創価教育学運動が一直線上に繋がる。1931年に教職を辞した牧口は創価教育学会活動に専念。創価教育学会は当初、会則に「教育学の研究と優良なる教育者の養成とをなし、国家教育の改善を計るを以て目的とす」と謳う純然たる教育団体であったが、やがて牧口はその機関誌に「所詮宗教革命によって心の根底から建て直さなければ、一切人事の混乱は永久に治すべからず」と書くようになり、会員獲得に「祈伏」を用いるようになる（島田2004：cf. 32）。

こうして牧口が日蓮正宗による宗教的「創価教育」を目指す以上、教育の素材でとされていた「郷土」も宗教的経験の場と読み替えてゆかなければならない（おそらく牧口自らにとっても自己の生活空間、親密圏＝「郷土」を判断停止を経て虚心坦懐に省みた結果、国家主義と連続する氏神信仰を否定して日蓮信仰に至ったという自負があったのではないか）。こうした牧口

に対して、かつて新渡戸稲造の主宰する地理学者、民俗学者集団「郷土会」に共に所属し、道志村への調査旅行にも同行した柳田国男は『価値論』に寄せた推薦文で「方法の緩急に就て若干の見解を異にする」と書いている。この僅かな表現の中に柳田がこめた思いを後世に生きる私たちは色々と推察することもできるだろう。その後、牧口は自らの信仰を貫き、伊勢神宮から配布される神宮大麻を焼却し、治安維持法第七条「国体ヲ否定シ又ハ神宮若ハ皇室ノ尊厳ヲ冒瀆」した治安維持法第七条違反の罪を問われて投獄され、44年11月に獄死した。創価教育学会は戦後に改めて既に亡き牧口を初代会長と仰ぐことで創価学会として再出発することになる――。

そのメディア機能をこう喩えるのはどうだろう、「郷土」とは一種の「負圧」を帯びている。真空が外気を吸い寄せるように「郷土」は何ものかを引き寄せ、繋いでゆくメディアとなる。志賀の「郷土」は国粹主義、対外拡張主義を引き寄せ、牧口の郷土は宗教的な世界観を引き寄せた。ならば、たとえば先の安倍晋三政権が愛郷心を強調したのは、それが何を引き寄せることを期待したからだったのか (cf. 高木2007)。郷土を「メディア」として見ることは、そこに接続されてゆくものの如何について私たちを多少は用心深くさせてくれる効用があるかもしれない。 (2008年10月8日記)

●註

(1) 札幌農学校を「フロンティア」と呼ぶ松田にとって北海道に先住していたアイヌの人々などはどのように意識されていたのかは気になる。既住民への侵襲ということでは、たとえば本文で後出する志賀の南洋巡航先であったクサイ島も、やがて南洋庁の管轄として日本の支配下に入るし、戦後は水爆実験で地上から消滅したビキニ環礁の至近の島である。文芸評論家・川村湊はビキニ環礁での水爆実験が語られるとき、第五福竜丸被爆事故の被害者として日本人が語られるだけで、そこがかつて日本の植民領土であった事実が一切触れられないことに違和感を呈した (『南洋、樺太の日本文学』筑摩

書房1994)。その川村を引いて志賀やクサイ島を語る上で歴史性を無視しがちな傾向に注意を喚起したのは山本・上田（1997）が数少ない例外でしかない。

（2）亀井・松木（1998：cf. 376）より卒業名簿記載リストを転載しておく。7月9日農商務省直轄札幌農学校ニ於テ第四回学位卒業式ヲ執行セラル（中略）本日学位ヲ受ケシ諸氏ハ次ノ如シ

北郷文五郎（岡山県士族），福原鉄之輔（山口県平民），菊池熊太郎（岩手県平民），頭本元貞（鳥取県平民），佐藤辰三郎（青森県士族），渡瀬庄三郎（静岡県士族），中根寿（札幌県士族），手嶋十郎（京都府士族），志賀重昂（愛知県士族），岡文二（宮城県士族），黒岩武雄（愛知県平民），結城祥吾（福島県士族），河村九淵（東京府士族），武信芳太郎（鳥取県平民），三増叅吉（山口県士族），早川鉄治（岡山県士族），山下敬太郎（兵庫県平民）

（3）後藤狂夫『志賀伝記』には宴席で殴りつけ、懲戒免職になったとあり、読売新聞『明治紳士録』には県令の頭に汚物を注いだという記載があるという（山本・上田1997：cf. 28）。志賀の「豪傑」ぶりを輪郭づける多くのエピソードのひとつだが、事実の程は分からない。

（4）ただし『日本風景論』が明治期に福沢に次ぐ支持を受けていたという説は文庫版解説を書いた登山家・小島烏水の作った「神話」だったようだ。

山本・上田は、小島が志賀人気を証し立てるために引いた『時事新報』の「名著百選」選考のためのアンケート調査（1909年）で、『福翁百話』支持者が1000人中110人いたのに対して『日本風景論』支持者は15人に留まっていた事実を示す（ibid.: cf. 225～7）。14もの版を重ねているので売れなかったわけではもちろんないが、書籍単体としては福沢と肩を並べるほどの支持までは受けていなかったというのが実情のようだ。しかし『日本人』刊行が志賀の業績として先行したことが象徴的だが、既に大量印刷技術を背景にする「雑誌の時代」が始まりつつあり、その中で相互に言及され合う中で出版された『日本風景論』と、それ以前の刊行である『福翁百話』の影響力を書籍単体の支持数のみの尺度で一概には論じられないだろう。

（5）加藤典洋は『日本風景論』について次のように書いている。「この本

にはいまはく達が小中学校で見るのとほぼ同様の〈日本全図〉が見開き二頁大で掲げられる。しかし、僅か二十七年前まで、人々はこのような“高み”から藩や社会階級の色分けなしに〈日本を〉“見下ろす”ことなど、思うことさえできなかつたのである」（加藤1990：cf. 178）。しかし日本地図を掲載したり、各地の景観・風土が山水画的絵画と洋画的スケッチで対照的に描写する「形式」は既に明治初期に教科書によって採用されていた（李1996：cf. 173）。その意味で『日本風景論』を受容する感性的土壌はすでに初等教育のなかでつくられ始めていたと言える。『日本風景論』が強い影響力を持ち得たとすれば、日清戦争開戦と時期を同じくして「用意されていた土壌」の上に刊行され得たタイミングの良さだったのであろう。

（6）内村鑑三は例外的に『日本風景論』刊行時にその秘めたイデオロギー性について言及し、「Patriotic Bias（愛国偏）なり」と指摘する書評を書いている。とはいえ内村が不敬発言で世間の逆風を受けていた中で死去した彼の愛妻の葬儀に、志賀は馬に乗ってひとり駆けつけ、寂しい葬列の先導役を果たしたエピソードが残っているように、二人の関係は愛憎入り混じり一筋縄では括れないが、そこに牧口も加えて三者がほぼ相前後して北海道・札幌を經由して人格形成している事実は、三者三様の人生を「場所」の視点からひとつに束ねて説明する仮説を立てられないものかと期待させる。こうして「場所」を拠点に思想史的に検討されるべき北海道経由者の中には新渡戸稲造、河井道なども含められるかもしれない。

（7）牧口は初期の論文『観念化作用』においてもカントの継承者ヘルベルトの「類化作用」の概念を引きつつ、現象学的な認識過程分析を行っている。60年代までは高木宏夫『日本の新興宗教』、鶴見俊輔『祈伏』など学術的な創価学会研究があり得たが、70年代以降、途絶えているが、牧口についても現在の創価学会の政治的性格とは距離を置いて、地理学、宗教学史的に評価をしてゆく本格的研究が待たれる（cf. 島田2004）。

●引用言及文献（人名言及順）

志賀重昂1995 『日本風景論』 岩波文庫

- 1927 『南洋時事』（『志賀重昂全集』第三卷所収）志賀重昂全集刊
行会
- 大室幹雄2003 『志賀重昂『日本風景論』精読』岩波文庫
- 松田道雄1975 「志賀重昂<明治の国家主義>」（『日本の思想家上』所収）
朝日新聞社
- 猪瀬直樹1986 『ミカドの肖像』小学館
- 亀井俊介1988 『ナショナリズムの文学』講談社学術文庫
- 前田愛1989 『幻影の明治』（『前田愛著作集』第四卷所収）筑摩書房
- 1990 「江山洵美是吾郷」（『前田愛著作集』第六卷所収）筑摩書房
- 井上勝生2006 「札幌の農学校と植民学の誕生」（『「帝国」日本の学知』第
一卷所収）岩波書店
- 山本教彦・上田誉志美1997 『風景の成立——志賀重昂と『日本風景論』』
海風社
- 亀井秀雄・松本博1998 『朝天虹ヲ吐ク』北海道大学図書刊行会
- 池田弥三郎1976 『たが身の風景』読売新聞社
- 李孝徳1996 『表象空間の近代——明治「日本」のメディア編制』新曜社
- ホブズボーム，エリック1992 『帝国の時代』野口建彦・照子訳 みすず書
房
- 勝原文夫1979 『農の美学』論創社
- 加藤典洋1990 『日本風景論』講談社
- 牧口常三郎1971 『人生地理学1』聖教新聞社
- 1979 『価値論』第三文明社
- 1981 『教授の統合中心としての郷土科研究』（『牧口常三郎』全
集第三卷所収）第三文明社
- 竹内啓一2004 「『人生地理学』の日本地理思想史上における意義」（東洋学
術研究第152号所収），（財）東洋哲学研究所
- 塩原将行2003 「『人生地理学』と牧口先生」（『大白蓮華』2003年6月号掲
載。ここでは <http://ssn.cside.to/education/shioharale.htm>
のインターネット版を参照した）

- 竹中労1985 『聞書・庶民列伝——牧口常三郎とその時代・春の修羅
(2)』潮出版社
- ベルグ, オギュスタン1998 「イーファー・トゥアン『空間の経験』日本語版
解説」筑摩文庫
- 鶴見太郎2002 『ある邂逅』潮出版社
- 島田裕巳2004 『創価学会』新潮社
- 高木博志2007 「「郷土愛」と「愛国心」はどのように繋がれてきたか」
(『論座』2007年2月号所収)朝日新聞社
- 内村鑑三1984 『地人論』(『日本の名著38』所収)中央公論社

●参照文献 (著者五十音順)

- アンダーソン, ベネディクト1997 『定本幻想の共同体』白石さや, 隆訳
書籍工房早山
- 内田隆三2002 『国土論』筑摩書房
- 内村鑑三2006 『愛国心をめぐって』書肆心水
- 蝦名賢造2003 『札幌農学校・北海道大学百二十五年』西田書店
- 大澤真幸2007 『ナショナリズムの由来』講談社
- 柄谷行人1988 『近代日本文学の起源』講談社現代文庫
- 佐伯啓思2008 『日本の愛国心』NTT出版
- 酒井哲哉2006 「帝国秩序と国際秩序」(『「帝国」日本の学知』第一巻所
収)岩波書店
- 塩原将行2000 「牧口常三郎と郷土会」(東洋学術研究第144号所収), (財)
東洋哲学研究所
- ジンメル, ゲオルグ1999 『風景の哲学』(『ジンメル・エッセイ集』所収)
川村二郎訳 平凡社
- 高倉新一郎(解題)1975 『復刻札幌農学校』北海道大学図書刊行会
- トゥアン, イーファー1992 『トポフィリア』小野有五・阿部一訳 せりか書
房
- 中川浩一1994 「直観原理に基づく地理教育の系譜と牧口常三郎」(東洋学

術研究第133号所収), (財) 東洋哲学研究所

ベルク・オギュスタン1990 『日本の風景, 西洋の風景』篠田勝英訳 講談社現代新書

1994 『空間の日本文化』宮原信訳 ちくま学芸文庫

源昌久2003 『近代日本における地理学の一潮流』学文社

村尾行一1997 『牧口常三郎『人生地理学』を読む』潮出版社

米地文夫1996 「志賀重昂『日本風景論』のキマイラ的性格とその景観認識」(『岩手大学教育学部研究年報第56巻第1号』所収)

安丸良夫2007 『日本ナショナリズムの前夜』洋泉社